連載　第30回

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家　三木　哲

● 琉球古民家の再生…

話しはバブル崩壊前の1989年にさかのぼる。

私は初めて木造住宅のリフォームを経験した。

沖縄県八重山郡竹富町黒島の伝統的な琉球古民家の再生である。

リゾート物件を扱う会社が離島の廃屋を買い上げ、解体修理し別荘にして分譲した。

沖縄本島より台湾に近く、石垣港には台湾との定期航路の貨客船が入港する

黒島は、石垣島から高速挺で約30分ほど走ったところに浮かぶ周囲12.5㎞の小島である。

サンゴ岩の垣根で囲われた赤瓦の集落に民宿が１軒、小学校が一つあり、200人ほどの島民は島・全体を牧草地とし、3500頭の黒毛和牛を放牧し飼育して暮らしている。

最近まで電気や水道がなく軒先に雨水を貯める水瓶が２基、配置され、生活用水としていたが、当時は17㎞離れた西表島から電気と水道が海底を通って供給されていた。

給排水衛生、電気・ガスなどのライフラインの確保が別荘販売に不可欠で、汲取り便所を廃止し、浄化槽と土壌浄化装置を設置して水洗便所や生活排水を処理し、プロパンガス給湯設備を設けた。

雨水集水用の水甕は、昔の島の生活を記憶する装置として、そのまま残した。

２間の畳部屋と板の間、縁側に土間の間取りは踏襲し、竹を並べた床下地は束と床組を更新して琉球畳敷きとし、再使用できる縁側の床板を修復し、襖・障子は更新した。

土間空間には珊瑚岩をスライスした「粟石」を敷き詰め、キッチンセットを造り付けてリビングキッチンとした。ここは、同じ粟石敷きの浴室、洗面所・便所につながる。

住宅設備機器はリニューアルした。

屋根は丸太の垂木の上に竹を編み泥を載せて赤瓦を葺いていた。これを一旦除去し構造用合板にルーフィングを貼り、島瓦を桟瓦葺きで葺替え復元し、室内の天井は撤去し、小屋組をクリーニングし、そのままインテリアにあらわした。

リフォーム工事は石垣島の工務店・大一工業・具志堅尚に依頼した。

彫刻家イサム・ノグチがデザインした和紙の照明器具、エアコンや木製建具など石垣島で調達した。地元の福木(槇)は耐久性に富む構造材で、珊瑚岩の基礎石に乗った柱は腐食せず健全であった。梁・桁、胴差、敷居・鴨居など健全な構造材は補修・クリーニングし、再使用した。面積が約200坪の庭の外周の珊瑚岩積の石垣は崩れかけたところを積み直した。

ここは台風の通り道なので建物の軒の高さを低くし、珊瑚岩石積の高さと軒高、および、その距離を工夫してある。土庇の外側の床に珊瑚岩を並べて一段高くしたが、この段差はハブが床下に入り込まないようした仕掛けである。室内はすべての部屋から小屋裏が見え、109㎡の面積の連続的な空間処理とし、サラッとした南島のインテリアに仕上げた。

この工事費は600万円、設計監理料は60万円。設計料は交通費と宿泊費で消えた。

私の祖父は千葉県佐倉の堀田藩の生れで、若い頃、藤沢駅に移住し、有床の診療所を開業した。父の姉が診療所を継いだが、藤沢駅北口の再開発で移転となり、父も補償金を得て1970年代に八重山郡竹富島にアトリエと住宅を建て、絵を描いて生活していた。

私はこの仕事中に、スキューバダイビングのライセンスを取得した。

少年時代に江の島で素潜りしていた経験が役立ち、すぐライセンスを取得できた。

八重山の海はマンタが生息し素晴らしいダイビングポイントだった。以降毎年夏に事務所スタッフと八丈島や伊豆七島、セブ、ガム・サイパン島、プーケットなどにダイビングに出かけるようになった。

みき・てつ

㈲共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、30年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。